



みち 古道が紡ぐ物語



壬申の乱の足跡を訪ねて①吉野隠棲

～大海人皇子、大津宮（滋賀県大津市）を脱出し吉野（奈良県吉野町）に入る～

天智天皇の弟・大海人皇子と、天智天皇の子・大友皇子とが皇位継承をかけて争った「壬申の乱」。東国の豪族の助けを借りてこの争いに勝利を収めた大海人皇子は即位し（天武天皇）、皇親政治による中央集権を進め、日本固有の文化成立にも大きな影響を与えたと言われます。

今月から「壬申の乱」の足跡を訪ね、初回となる今回は、大海人皇子が大津宮から菟道・嶋宮を経由し吉野へと逃れた行程を辿ります。

大海人皇子、譲位の提案を固辞し吉野に入る

■病床の天智天皇、大海人皇子に後事を託す

「乙巳の変（645年）」で、中臣鎌子（藤原鎌足）とともに蘇我宗家を打倒し、その後の「大化改新」と呼ばれる改革を主導することで強力に中央集権を推し進めた中大兄皇子。しかし、「白村江の戦い（663年）」で日本・百濟遺民の連合軍が唐・新羅連合軍に大敗を喫すると、威光に翳りが差す。

中大兄皇子は、大陸からの侵攻に備え、667年に大津宮（滋賀県大津市錦織）へと遷都し、翌668年には天皇として即位した（天智天皇）。しかし、遷都は多くの人民に支持されず、新都では昼夜を問わず出火があったと『日本書紀』は記しており、天智天皇の求心力低下が垣間見える。

671年10月17日、病床に伏した天智天皇は、皇太弟であった大海人皇子への譲位を提案した。

しかし、大海人皇子はこれを固辞した。というのも、天智天皇は同年に子の大友皇子を太政大臣としており、本心から大海人皇子に位を譲る気はなかったと見られる。また、天智天皇は冒頭で述べたように「乙巳の変」というクーデターで政権を奪取し、その後も様々な政敵を死に追いやってきたことから、大海人皇子はこの譲位が巧妙な策謀である可能性を疑い、慎重に言葉を選びながら即位を辞退したのでらう。

■大津宮脱出、菟道・乃楽山を越えて嶋宮へ

決断後の皇子の行動は素早かった。即日出家して法服に着替え、自家の武器を返納、早くも10

月19日には、自身の妻で天智天皇の娘でもある鷗野讚良皇女（のちの持統天皇）や舎人らを引き連れ、吉野に向けて大津宮を出立した。

さて、これまで大津宮の正確な所在については謎とされてきたが、1974年に大津市錦織にて行われた発掘調査で大型の柱穴が発見され、その後も遺構の発掘が相次いだことから正確な位置が確定されることとなった。当地はJR湖西線・大津京駅（2008年に西大津駅から改称）や京阪石山坂本線・近江神宮前駅に近く、住宅街として開発が進んだことから、古京の面影は点在する遺構にわずかに留められるのみである。

菟道（京都府宇治市宇治）まで大臣らの見送りを受けた一行は、木津川に沿って南下し、乃楽山（平城山）を越え、奈良盆地を南下して同日夕方に嶋宮（奈良県明日香村島庄）に到着した。大津宮から嶋宮までは、現在の道のりで70kmほどであり、休みなく歩いても14時間かかる。一行の急ぎようが窺い知れよう。

嶋宮は、「乙巳の変」の舞台となった飛鳥板蓋

（右）住宅街に遺構が点在する大津宮跡（滋賀県大津市錦織）



（左）宇治橋（京都府宇治市宇治）の現況

宮の跡地から約1km南東に進んだ場所にあったと推定される。蘇我馬子の墓と言われる石舞台古墳に隣接する蘇我氏私邸が「乙巳の変」後に接收されたものと考えられ、「壬申の乱」後には大海人皇子の子・草壁皇子の宮として営まれた。

現在、嶋宮跡は「明日香の夢市」として農産物等の直売所となっており、2階に併設された農村レストラン「夢市茶屋」では、村内産の飛鳥米や野菜や果物を使った料理が楽しめる。かつて権勢を振るった蘇我氏の本拠地は、長い時を越え、明日香村の新たな観光交流拠点として賑わいを見ている。

■嶋宮から芋峠を越え吉野に入る

さて嶋宮に到着した大海人皇子一行は、束の間の休息後、再び吉野に向けて出立し、翌10月20日、吉野宮に到着した。吉野入りには複数のルートが考えられるが、一刻も早く吉野入りしたい彼らの心情を察するに、最短ルートである芋峠を越えたと考えるのが自然だろう。

これは現在の県道15号線に相当し、明日香村稲淵・栢森、吉野町千股を經由して吉野町中心部に通じるルートである。

※なお、県道15号線は台風災害のため、2013年9月から明日香村栢森～吉野町千股間で通行止めとなっていることから、迂回が必要である（2014年10月現在）。

ところで、一連の大海人皇子の吉野入りの目的は何だったろうか。当面は天智天皇のもとを離れ窮地を脱するためであろうが、皇子は自身の出家・遁世のみで、争乱が避けられるとは思っていなかっただろう。

『日本書紀』には、天智天皇が大海人皇子の吉

(右) 棚田風景の広がる稲淵（明日香村稲淵）



(左) 吉野宮故地の近くに建つ吉野町歴史資料館（吉野町宮滝）

野入りを許したことについて、「虎に翼を着けて放つようなものだ」と評する「或る人」の発言を載せている。皇子は来るべき争乱を予見し、戦闘準備を整えるため吉野に入ったと見るべきだろう。

一行の吉野入りから1か月余り後の671年12月3日、天智天皇が崩御。明けて672年5月、皇子のもとに「天智天皇の陵を造るとの名目で尾張・美濃で人夫が徴発されているが、各人に武器を持たせている。必ずや変事があるに違いない」との急報がもたらされ、事態は風雲急を告げるのである。（次号に続く）（太田宜志）

大海人皇子一行 吉野に至る道のり



壬申の乱 関係年表

とき	主な出来事
645年	乙巳の変。中大兄皇子・中臣鎌足（鎌足）、蘇我宗家を滅ぼす
663年	白村江の戦い。倭国・百濟遺民の連合軍、唐・新羅連合軍に大敗
667年	外敵の侵入に備え、近江大津宮に遷都
668年	中大兄皇子、即位（天智天皇）
671年10月17日	大海人皇子、天智天皇から譲位を提案されるも、これを固辞
10月19日	皇子一行、未明に大津宮出立。夕方、嶋宮到着
10月20日	皇子一行、吉野に入る
12月	天智天皇、崩御
672年5月	大海人皇子、近江朝廷による尾張・美濃の徴兵を知る